

## 敗戦後 70 年に想う

参加型システム研究所理事長 神奈川大学名誉教授 後藤 仁

すでに、本誌先月号（2015年7月号）で参加型システム研究所理事会としての声明を公表しているが、本稿では、私のまったくの個人的見解を披露させていただく。

### 反省と謝罪

敗戦時私は5歳であった。まだ就学前である。私は戦争を知らない老人達の一人である。敗戦に対する責任は、負ってはいないと一時は考えていた。なぜ当時の大人は無謀な戦争に突入し、しかも戦争の負け方について真面目な考慮を払わなかったのか、不思議であった。

その後いわば物心がついて、日本社会を構成する市民の一人として、戦争と敗戦についての先人の誤ちを引き受け、日本社会を歴史を持つ社会とすることに、ともに貢献しなければならないと考えるに至った。

そもそも直接の関係者以外、誰も責任を取らない行為しかなければ、社会は続いていけない。現在の世代の行為は過去の世代から当然影響を受ける。そして未来の世代に影響を及ぼす。こうして歴史が生まれ、続いていく。

歴史を貫いて責任が引き継がれていく。そういう社会では誤ちは反省される。反省して謝罪すべきは率直に謝罪をしなければならない。人間である以上誤ちは避けられない。しかし、同じ誤ちは繰り返してはならない。

### 反省と戦争

潔く反省をし、謝罪をする。それがなかなかできないでいる。過度の自尊心が一因であることは、間違いない。たしかに、一人一人の市民はそれぞれに独特であり、それぞれの社会もそれぞれに特色を持つ。しかし、どこかが特別に秀でているということはない。一時流行した、日本特殊性論は誤りである。

帰化という言葉も誤解を生じやすい。帰化だから、文化の低いところから高いところへ移るのが帰化なのだが、それは不正確である。実際に生じるのは、渡来である。1970年代から帰化人でなく、渡来人と呼ぼうという気運が高まってきていた。現在のヘイトスピーチなど極めて破壊的であり、文化度が低いと言わざる

をえない。相手をおとしめることで自らを高みに置こうとするのは卑怯である。だいたい、他人をけなさなければ成立しない優位など、本物のはずがない。

苦々しいのは、妬みや嫉みから来る悪感情の激化である。今まで侮っていた相手が、力をつけて自分を追い越していく。それに対する焦りが火に油を注ぐ。そういう中で戦争が忍び寄って来る。

ところが日本社会の最大の反省点は、戦争を防げなかったことなのである。敗戦後70年にあたって、この反省点をよくかみしめるべきなのである。

### 戦争と平和

戦争が引き起こす惨禍はますます甚大なものになってきている。日本社会はもうこれ以上、戦争を起こす主体となってはならない。70年前そう決意したはずではなかったか。50年、60年の節目ごとにこの反省は繰り返し思い起こされてきた。そして守られてきた。日本社会は、戦争を防ぎ平和を守るうえで地域と世界に貢献し、自らの繁栄と安全も確保してきた。

これは蔑むべきことではなく、誇りとすべきことなのである。痛切な反省と誠実な謝罪は、戦争防止と平和の保持とに切り離しがたく結びついているのである。

自分だけの誤ちではない。相手もやっていることだ。戦争ともなれば普通のこと、自分だけが責められる必要はない。そういう意見もある。しかし、相手もやっているからといって、みんながやっているからといって、自らの誤ちが帳消しになるわけではない。自らの誤ちは誤ちとして残る。それに対する反省と謝罪が、引き続き求められるのである。

敗戦後70年を迎えるにあたって、戦争を防ぎ、平和を守るための、広範な社会運動を展開していこう。皆が細部に至るまで一致する必要はない。まさに、多様性(diversity)で各人の立場はいろいろであっていい。それぞれが戦争に対する「戦争」に——暴力の極みである戦争に反対するのだから、暴力を使うわけにはいかないのだが——志願兵として参加してほしい。とりあえず、敗戦後70年についてのそれぞれの想いを聞かせてほしい。特に若い世代に対しては、そのことを強く期待する次第である。

(ごとうひとし)